

6月28日の講義（ジャーナリスト・大熊一夫）

「事実は小説より奇なり」こそ、ジャーナリズムの醍醐味

●僕は朝日新聞記者に向いていなかった（夜討ち朝駆けが大きらいだった。記者クラブは昼寝の場所だった。あーせいこうせい、と先輩から指図されるのは、大きなストレスになった。御用聞きのような取材方法で僕が特ダネをとる確率は、極めて低かった。入社して5年もすると、自分はこの世界のおちこぼれであることが、よーくわかった）

●1969年7月、新宿で1カ月ほどフーテンをやった。もとは、日本医大の精神科の研修生が書いた拙い論文だった。たしか、これを先輩に見せられて、記事にしてくれ、と言われた。先輩のだれかが、ふざけて、「オマエ、自分でフーテンやってみたらどうだ」と言った。これならできそうだ、と思った。

●東京版に「新宿フーテン記」（資料4）を6回連載した。新聞社に入って初めて、先輩から「きみは洛陽の紙価を高（貴）めた」とほめられた。「本気で取材すると、その向こうに想像をはるかに超えた世界が広がっている」ことを初めて実感できた。

●それから3カ月した時、精神病院に勤める若者から、鉄格子の内側の世界の様子を聞く機会があった。フーテンの体験で味をしめた僕は、患者としては入れないだろうかと本気で考えた。

●初めは、統合失調症に化けようと思ったが、極めて難しいことが分かった。ある有名な精神科医が「酔っぱらって精神病院に行くと入れてくれるかも……」と知恵をつけてくれた。

●「ルポ・精神病棟」（資料3）を社会面に連載した。入社して初めて、自分の記事が、全国800万の読者に読まれた。連載が始まると、職場の電話が鳴りっぱなし。段ボール箱3杯分くらいの手紙が来た。

●連載が終わってから、事態の大きさに気がついた。圧巻は、日本精神神経学会の「学会員に訴える」だった。時間をかけて取材しないことには分からないものが、世の中にはたくさんあることを思い知った。

●あの入院で「不潔部屋」を見て、精神保健と認知症問題は、同じ根っこの問題だと気がついた。

……